

【論文】

「自由エネルギー」をめぐるフロイトの誤読？

——デリダとラプランシュの『快原理の彼岸』読解から——

吉松 寛

0. はじめに

『快原理の彼岸』（1920年、以下『彼岸』と略記）は、おそらくフロイトにおいてもっとも謎めいた著作の一つであろう。だが、その論理には飛躍が多く、フロイトの娘であるアンナを含むフロイトの弟子をはじめとした一部の精神分析の学派では無視されてもきた¹。その反面、20世紀フランスで『彼岸』は、その晦渋さゆえにラカンやドゥルーズをはじめとした多くの論者による特異な読解を導いてもきたことも事実である。本稿で扱うジャック・デリダ（1930-2004）、そして部分的に参照するジャン・ラプランシュもまた、その系譜に含まれるものであろう。本稿の目的は、デリダが『彼岸』を読解した『絵葉書』所収の「思弁する——フロイトについて」（以下「思弁する」と略記）の初出が1975-76年講義『生死』であったことに注目し、この論考における「生」の問題を考察することである。そこで注目するのはデリダが「思弁する」のキーワードの一つとした「拘束（Binden）」という概念である。この概念はフロイトにおける「自由エネルギー」「拘束されたエネルギー」に由来する。この二概念は熱力学第二法則、そしてかつてフロイトと共同研究をしたブロイアーに拠るものだが、のちに検討することになるように、フロイトはブロイアーを「誤読」している。この「誤読」をデリダがいか

に受け取り、『彼岸』を読解したのかを検討していく。

デリダの「思弁する」における生の問題を扱った先行研究としては、クリストファー・ジョンソンも、本稿と同じくフロイトにおける Binden 概念へのデリダの注目を焦点化しているが、フロイトの理論における Binden の意味の揺らぎが扱われていない点、および——これは刊行時期の問題もあるが——『生死』講義との接続が図られておらず、本稿とは射程を異にする²。また、エリーズ・ラミー＝レストッドは、『科学的心理学草案』から『彼岸』を経て、「マジックメモについての覚書」までを貫く問題として、生と死が混交することで可能になる「生き延び」概念があると述べており、これについてはわれわれも同意するところである。しかし、この生と死の混交をもたらすものが「反復（répétition）」であると主張する点で本稿とは異なる³。また、デリダの生の問題を扱っ

¹ Cf. 小川豊昭「『快原理の彼岸』——死の欲動と反復」『現代フロイト読本 2』、西園昌久監修、北山修編集代表、みすず書房、2008年、504頁。

² Christopher Johnson, *System and Writing in the Philosophy of Jacques Derrida*, Cambridge University Press, 1993.

³ Elise Lamy-Rested, *Exces de vie...Derrida*, Edition Kimé, 2018.

たものとしてはマーティン・ヘグルンドの『ラディカル無神論』があり、そこでは生という守られるべきものは、死という脅威を内在させることではじめて可能になるという逆説的な論理がデリダに一貫するとされる。この解釈には同意するが、彼はこのような事態を一貫して「自己免疫的」だと述べる⁴。「自己免疫性」という術語が登場したのは早くとも 1994 年の論考『信と知』においてであり、例えば本稿で最終的に提示することになる「拘束」や、他にも似たようなことを言い表す「差延 (différance)」、「緊縛構造 (stricture)」といった概念との差異が検討されていない。むしろ、これらの術語の差異を検討することで、デリダの思考の変遷を捉えることも重要であろう。また、われわれと同じく『生死』講義に注目するフランチェスコ・ヴィターレの『生脱構築』も、Binden 概念に注目しているが、快原理の支配というモチーフがデリダの晩年まで見られるという結論を出している⁵。この点については同意するが、われわれの結論はデリダがフロイトに見出す行為遂行性であり、結論において異なっている。加えて、ヴィターレもラプラランシュの『精神分析における生と死』に触れてはいるが、デリダとラプラランシュの差異は検討していない。

本稿ではラプラランシュ『精神分析における生と死』とデリダを比較したい。その理由は、デリダが部分的ではあるが直接言及している点、そしてラプラランシュが、「独自の切り口でフロイトのテキストを斬新に読み換え」⁶たラカンとは対照的に、内在的な読解によってフロイト理論を更新するという正統的な読解を精神分析家として行なっている点である。手続きとしてはまずデリダの『彼岸』の読解姿勢と、本稿で問題となる自由エネルギー／拘束されたエネルギーについての冒頭部での言及を確認する。次いで、ラプラランシュによる『彼岸』の読解と、自由エネルギーについてのフロイトの「誤読」についての指摘を検討する。そして、「思弁する」における Binden 概念が、デリダの『彼岸』読解および彼自身の生の概念においていかに重要な役割を果たしているかを考察していく。

1. 「思弁する」におけるデリダの読解姿勢

デリダが「思弁する」において注目するのは、フロイトが『彼岸』のなかで行なっている身振りである。『彼岸』は、のちにわれわれが言及することになる『精神分析における生と死』においてラプラランシュが語っているように、「部分的で表面的にしか、論理的要請に従っていない」錯綜した議論の組み立てによって構成されている (VMP, p. 181/202)。その論述の複雑さという身振りを分析することで、デリダは同書の意義を明確にしようとする。そのための方法として、デリダは『彼岸』を順々に読解し、それに

⁴ Martin Hägglund, *Radical Atheism—Derrida and the Time of Life*, Stanford University Press, 2008. [マーティン・ヘグルンド『ラディカル無神論 デリダと生の時間』吉松寛、島田貴史、松田智弘訳、法政大学出版局、2017 年。]

⁵ Francesco Vitale, *Biodeconstruction—Derrida and Life Sciences*, SUNY Press, 2018.

⁶ 十川幸司「訳者解題」、ジャン・ラプラランシュ『精神分析における生と死』十川幸司、堀川聡司、佐藤朋子訳、金剛出版、2018 年、241 頁。

注釈を加えるという仕方の読解姿勢をとっている。さて、『彼岸』は、以下のような断言めいた段落によって始まっている。

心の出来事は快原理によってその経過が自動的に制御される、とわれわれは精神分析の理論において無頓着に仮定している。すなわち、心の出来事はいつでも、ある不快な緊張に刺激されて始まり、ついで、最終結果がこの緊張の低下に合致するように、つまり、不快を回避し快を産出するように、舵取られ経過してゆく、と信じている。これまで研究されてきた心的プロセスを、心の出来事のこうした経過をにらみつつ考察するなら、経済論的観点がわれわれの仕事のうちに導入されることになる。思うに、局所論的契機と力動論的契機に加えてさらにこの経済論的契機を考慮に入れる叙述が、現在考えうるなかでもっとも完備した叙述であって、メタサイコロジ的叙述という名を与えて、特記するに値するものである。(J, p. 3/55)⁷

第一に、心的プロセスにおいて不快だとされる緊張をできるだけ低く保とうとする快原理が自明であると断言されている。デリダはこの断言を、精神分析理論が存在するという行為遂行的な発話であると述べる(CP, p. 292)。しかし、この快原理仮説に反する症例としての戦争神経症などの反復強迫が観察され、その考察から死の欲動という仮説が提示され、精神分析理論だけでなくフロイトの生物学主義的な仮説にまで応用されることになる。そして第二に、この快原理仮説を想定するために、三つの観点が用いられ、それによって可能になるメタ心理学理論の完璧さが言われる。まず、力動論とは「心的現象を、ある種の衝迫を働かせる諸力の葛藤や構成・組み合わせに由来するものとみなす観点」であり、「その力は結局のところ欲動に起源を持つ」ものである⁸。そして局所論とは「心的装置が、異なる性格や機能を備えたいくつかのシステムに分化されていると想定する理論もしくは観点」⁹で、フロイト理論においては無意識-前意識-意識という第一局所論と、エス-自我-超自我という第二局所論がある。そしてわれわれにとって最も重要なのはこれらに付け加えられる「経済論的観点」、すなわち「心的プロセスは定量化しうるエネルギー（つまり欲動エネルギー）の循環や配分に存する、換言するならそれらの増大や減少、等価性が可能となるものであるという仮説に関わるすべてを形容する」¹⁰観点である。この見地が重要となるのは、それが快原理やエネルギーの備給という問題と関連するからである。

さて、フロイトは続く段落で、快と不快の感覚について教えてくれる哲学や心理学の

⁷ 以下、『彼岸』からの引用については「J, p. n/N」として指示する（「n」は原書頁、「N」は既訳がある場合、その頁を指す。この点については他に略号で参照する文献についても同様。略号で参照する文献については文献表を見よ）。

⁸ Jean Laplanche / Jean-Bertrand Pontalis, *Vocabulaire de la psychanalyse*, PUF, 1967, p. 123. [ジャン・ラプランシュ、ジャン＝ベルトラン・ポンタリス『精神分析用語辞典』村上仁監訳、みすず書房、1977年、482頁。]

⁹ *Ibid.*, p. 484. [同前、82頁。]

¹⁰ *Ibid.*, p. 125. [同前、94頁。]

体系が存在せず、精神分析的見地から行なう思弁に基づく「このうえなく「緩い」仮説」が、つまり論理的に構築された議論に拠らない仮説が最善であるとも述べる (J, p. 4/56)。そこからフロイトは「心的生に存在し、いかなる形でも拘束されていない〔nicht irgendwie gebundenen〕刺激の量と、快不快を関連させることにした」という (J, p. 4/56)。このような快不快を刺激の量と関連づけるフロイトの方法論を、デリダは経済論的観点を優先するものとして解釈している。快原理は刺激の量を低く保とうとする傾向であり、『彼岸』において快原理の再検討を導く外傷神経症も、強すぎるショックに、すなわち過剰な刺激によってもたらされ、不快な外傷的体験を繰り返させるものである以上、この読解は正当だろう。そしてデリダは先の『彼岸』からの引用における、「いかなる形でも拘束されていない」というフレーズに注目している。「拘束された (gebundenen)」とは、初期から晩年にいたるまで、フロイトにおける経済論的な問題を貫く「自由エネルギー (freie Energie)」と「拘束されたエネルギー (gebundene Energie)」という対概念でも用いられる語である。自由エネルギーとは読んで字のごとく自由に動き回ることでできるエネルギーのことであり、無意識系において抵抗を受けずに直接的に放出される。このプロセスが「一次過程」と呼ばれる。他方で拘束されたエネルギーとは、前意識-意識系においてエネルギーが拘束されることで放出が遅らされる状態である。このプロセスは「二次過程」と呼ばれる。一次過程において、刺激としてのエネルギーが滞留すると、不快となる。それゆえに放散が求められる。しかし、例えば空腹になった赤ん坊は、空腹を満たすために母親の乳房を求める。このとき、幼児のなかでは空腹を満たす乳房の表象が想起される。だが、この空腹という刺激がつねにすぐさま解消されるとは限らない。それゆえ、この赤ん坊はそのような現実幻滅することになるが、それと同時に、現実としての知覚と、幻想としての表象を区別する指標が問題となる (EP, p. 420/38)¹¹。すなわち、自らの欲求がすぐさま満たされるとは限らないという現実を受け入れるために、刺激の放散を遅らせるためのプロセスが必要となる。二次過程はこのようにして要請される。そして一次過程はのちの用語法では快原理に、二次過程は現実原理に対応する。

さらに、ラプランシュとポンタリスによるとエネルギーが自由に動き回れる無意識において目指すのは「知覚的同一性を最短経路で作り上げること、すなわち根源的な充足体験が特権的な価値を与えた表象を幻想という形で再現すること」であり、そのようなフロイトの仮説をもたらししたのは、充足体験としての夢のモデルであるという¹²。ここから、快原理、無意識系、一次過程、自由エネルギーという概念グループと、現実原理、前意識-意識系、二次過程、拘束されたエネルギーという概念グループの二つに整理される。

フロイトはこの自由エネルギーと拘束されたエネルギーという対について、『彼岸』第4章で言及している。フロイトはこの箇所、この自由エネルギー／拘束されたエネルギーという概念を、ブロイアーに負っていると言う。

¹¹ なお、この幼児の例については中山元『フロイト入門』筑摩書房、2015年、254頁を参照。

¹² Laplanche / Pontalis, *op. cit.*, p. 342. [ラプランシュ、ポンタリス、前掲書、15頁。]

興奮は一つの要素から別の要素へと進んでゆくさいに抵抗を乗り越えられなければならない、そのようにして抵抗を低減させると興奮の持続的痕跡が残される（これを通道という）と仮定できる。それゆえ、意識系においては、ある要素から別の要素に移行するさいのそうした抵抗はもはや存在しないことになる。この考えは心的システムの諸要素についてブロイアーが示した、静止した（拘束された）備給エネルギーと、自由に動く備給エネルギーという区別とひとまとめにすることができる。（*J*, p. 26/78）

『彼岸』第4章ではまず、反復強迫の観察を受けて、心的システム一般についての理論についての仮説を立てるべく、まず意識、無意識、刺激保護という局所論が展開される。知覚-意識系においては外部からやってきた刺激によって知覚表象が作られるが、その刺激は持続せず、無意識のうちに保存される。すなわち、知覚-意識系において刺激が透過するため、エネルギーの移動は制限を受けない。他方で記憶を保存する無意識系において抵抗はあるものの、刺激は抵抗に抗って進行する結果、刺激が通過した箇所は抵抗が弱まり、そこは刺激が通過しやすくなる。これが通道と呼ばれるものであり、それは最初期の『科学的心理学草案』からすでに構想されたヴィジョンであった。この知覚-意識系および無意識系におけるエネルギーの通過が、ブロイアーの『ヒステリー研究』における説と軌を一にしていると言われている。つまりフロイトはここで、エネルギーの移動の自由さと認識の相関を説く。

デリダは『彼岸』冒頭部の読解において先取り的に、この箇所でのブロイアーからの借用に触れている。ただし、単に紹介するというよりも、問題を提起するという形での言及である。

ブロイアーとフロイトの共通の源泉は、ヘルムホルツによって提唱された二つのエネルギーの区別、つまりカルノー-クラウジウスの原理と、エネルギーの減衰とを考慮した区別である。内的な恒常的エネルギーは自由エネルギーと拘束されたエネルギーの総和に相当する、すなわち前者が減少するのと同時に後者が増大するという。ラランシュはフロイトが、非常に自由に「はなはだしい無礼さ」をもって、とりわけ「自由に使用可能な」の「自由」〔という語を〕「自由に動き回る」と逸脱させることで、彼が借用する記述を解釈したとほめかしている。（*CP*, p. 299）

フロイトはヘルムホルツの言う熱力学第二法則を取り違えており、デリダはこの事実について、ラランシュの著作から「はなはだしい無礼さ」という強い語を引用することで強調している。だが、デリダはこの引用に続く段落で「このエネルギー的「モデル」の借用によって出された問題を勝手ながら脇に置いておこう」として、フロイトの「誤読」を一度括弧に入れて読解を進めてしまう（*CP*, p. 299）。なぜだろうか。不快とはエネルギー量の上昇に対応し、快とはその減少に対応するという経済論的關係の原理は、

すでに『彼岸』を読んだことのある読者には周知されている通り、入り組んだ議論の末に複雑なものになってしまう。快原理は本来刺激や興奮を解消しようとする原理であったのに、死の欲動の仮説によってこの機能が掘り崩され、不快なものを積極的に求めようとする傾向さえ見出される。このようにして、『彼岸』においては快と不快は入り組んだものになってしまう。だが、デリダはこの関係性にこそ、彼自身の読解の可能性を見出す¹³。かくして自由エネルギーと拘束されたエネルギー、一次過程と二次過程、快原理と現実原理といった概念の関係が複雑化することや、それによってなされる議論の錯綜こそが、フロイトが『彼岸』で行う思弁を豊かにし、興味深いものにしてくれると言うのだ。このデリダの着眼点についてはのちにまた戻ってくることとして、次節ではデリダが通りすがりに言及するにとどめた、自由エネルギーについてフロイトがなした「誤解」およびラプランシュによるその指摘を概観しよう。

2. フロイトの「カードの取り違い」？——ラプランシュ『精神分析における生と死』

2.1 フロイトにおけるゼロ原理と恒常原理——ラプランシュによる解釈

先にデリダが言及していたラプランシュの議論とは、『精神分析における生と死』のうち、とりわけ第6章のことである。この箇所についてはデリダの参照の注釈のためだけでなく、デリダの『彼岸』読解との対照という意味でも注目に値するため、少々紙幅を割いてラプランシュの議論を追っていくことにする。この章におけるラプランシュもまた、『彼岸』を経済論的に読もうとしている。だが、ラプランシュはこの章の劈頭からすでに、『彼岸』の論理に内在する矛盾を見出している。すなわち、「経済論的な観点から見た最大の矛盾は、快原理の究極の形態である、緊張を全て根本的に解消する傾向と、不快をマゾヒズム的に探求することを同一の「欲動」に関連づけている点である。後者は、どう考えても緊張の増大としてしか理解できない」（VMP, p. 183/205）。確かに死の欲動は、戦争神経症の発見当初では快原理に一見反するものであるかに思われたものだったが、最終的に快原理が奉仕する対象となり、有機体が一切の緊張を解消して無機的なものへと向かおうとする傾向であるとされる。その傾向の向かう先は緊張が全くない涅槃の状態であるという。この結果だけ見れば、確かに緊張がゼロの状態であるが、それに至る過程において経済論的には不快な緊張が大きくなる。

この矛盾に対してまず彼が指摘するのは快原理という一つ概念の中に二つの原理が混在してしまっていることである。つまり、内的な緊張・興奮を一定程度の水準に保とうとする「恒常原理」と、内的な興奮をゼロにしようとする「ゼロ原理」である。恒常原理とは現代の言葉で言えばホメオスタシス・システムのようなもので、緊張が基準値よりも大きくなれば基準値に向けて緊張を和らげ、逆に基準値を下回れば緊張を引き上げようとする。これに対してゼロ原理は緊張をゼロにしようとする以上、ゼロに達し

¹³ 「この非単一性〔*non-simplicité*〕と非方向づけ〔*indirection*〕によって〔……〕、思弁に向けての汲みつくしえない蓄えが可能になる。」（CP, p. 299）

た段階で、基準値とかけ離れた状態のままになってしまう。だが、フロイトは恒常原理とゼロ原理について混同しているとラプラシユは言う。

さて、このゼロ原理は、最短経路で放散される自由エネルギー、一次過程、快原理という考えと同一視されている。すなわち、前節でわれわれが見た、無意識系が属する概念グループとゼロ原理は結びついている。この心のモデルにおいて恒常性は、ゼロ原理に対する修正という位置づけにある。つまり、前節での赤ん坊の例をとるなら、空腹によってもたらされた緊張を解消するために、赤ん坊は乳房を求める。それが必ずしもすぐに解消されないという現実を受け入れるために、緊張をゼロに保とうとするシステムは、緊張を一定の水準に保とうとするシステムに修正される。すなわち、恒常性は、拘束されたエネルギーや二次過程に結びつく。

このゼロ原理が恒常原理よりも優先されるという主張は『彼岸』においても保たれるとラプラシユは指摘する。彼の読解では、当初は緊張をゼロに保つという機能を持っていた快原理はこのテキストにおいて現実原理に変化し、当初快原理が担っていた機能を果たすのが、新たに導入された涅槃原理や死の欲動である。だが、フロイトはさらにこの原理や傾向を心的システムだけでなく、生命の営みそのものに差し戻そうとする。そのような生命に内在する死への傾向という思想の系譜を、ラプラシユはフロイトの初期の著作から読み取ろうとする¹⁴。

2.2 「はなはだしい無礼さ」——フロイトにおけるエネルギー論の問題

このように心的緊張をゼロに保とうとするフロイトの考えは、初期の著作からすでに見いだせるというのがラプラシユの説である。そして、その傾向はブロイアーの『ヒステリー研究』と同時期に書かれたフロイトの『心理学草案』の比較からも見いだせるという。有機体における呼吸の自動調節機能を研究していたブロイアーにおいてもまた、恒常性とはホメオスタシスのようなものであるとラプラシユは言う。そして、ブロイアーの研究はとりわけ中枢神経系における自己調整機能を扱うものであった。それゆえ、ブロイアーにおいて運動エネルギーが自由に循環するのは脳内の緊張性の興奮——これをブロイアーは「静止エネルギー」と名づける——が最適状態にあるときだとされる。すなわち彼において重要なのは、先に検討した恒常原理を想起するなら、エネルギーの量を一定の水準に保つことなのである¹⁵。それゆえブロイアーは、脳内の緊張性興奮が

¹⁴ このゼロ原理と恒常原理との関係については以下も参照。十川幸司「死の欲動とマゾヒズム」、『フロイディアン・ステップ』みすず書房、2019年、169-190頁。

¹⁵ 「われわれは、有機体は緊張性脳興奮を恒常的に一定に保とうとする傾向をもつ、という言い方をした。しかし、われわれがこうした傾向を理解できるのは、それによってどのような欲求が成就されるのかを見抜くことができる場合のみである。温血動物が体温を恒常的に保つ傾向をもつことをわれわれが理解するのは、適度な体温が諸器官の機能のための最適状態であることを、経験的に知っているからである。〔……〕脳内の緊張性興奮の高さについても、同じく最適条件があると想定しても良いと私は考える。緊張性の興奮がこの水準にあるとき、脳はあらゆる外的刺激を受け入れることが可能になり、複数の反射経路の通道がなされる——もっとも正常な反射活動の程度に限られるが。そしてひとつの反射に正確に対応する諸表象が作り出す相互関係に応じて、蓄積された表象が呼び覚まされ、連想で結びつくことができるようにな

最適状態にあるとき、運動エネルギーが最適な状態で循環すると言う。この状態のとき、思考の働きは活発になる。すなわち、意識における精神の活動が最適化される。それとは反対に、夢において連想は不完全で妨害が多いとも述べる。これは自由連想の結びつきがもっとも促されるのは夢、そして一次過程においてであるとするフロイトの仮説と逆行するものである¹⁶。

ラプランシュはブロイアーの仮説とフロイトのエネルギー論を比較することで、フロイトにおけるゼロ原理の優位をさらに強調しようとする。ここでラプランシュは両者の共通の源泉たるヘルムホルツにおける自由エネルギーと拘束エネルギーの区別を確認している。ヘルムホルツが前提としていたのは、以下のような事態である。すなわち、エネルギーは最初に「仕事を生み出す力」として定義されるが、そのシステム内で保存されうる内的エネルギーの総量は無限的に再利用できるものではない。例えば電流を流す場合、導線における電気抵抗によって熱が生じるため、流した位置よりも受け取る位置の方が電気エネルギーは少なくなる。ヘルムホルツはこのような法則から、仕事に再転換可能なエネルギー（すなわち受け取られた電気エネルギー）を「自由エネルギー」として、熱という形で漸減するエネルギーを「拘束エネルギー」と定義した¹⁷。自由エネルギーはシステムが働き続けるかぎりで見減りし、拘束エネルギーはそれに応じて増加する。

絶えず放出され続けるエネルギーという点で、フロイトが自由エネルギーと呼ぼうとしたものは、ヘルムホルツにおいては拘束エネルギーに対応することになる。つまり、フロイトは自らの理論における自由エネルギーと拘束されたエネルギーとの区別を、ブロイアーの静止備給（拘束）エネルギーと自由（備給）エネルギーの区別と同一視していたが、本来であればフロイトの言う自由エネルギーは静止エネルギーと、拘束されたエネルギーは運動エネルギーとなるべきものであった。この対応関係のねじれについて、ラプランシュは以下のように言う。

これはカードの配り違いなのだろうか。二重の取り違いなのだろうか。フロイトはヘルムホルツが熱力学第二法則で用いた用語を取り上げているが、「自由な」という形容詞を「自由に使用可能な」という意味ではなく、「自由に移動できる」という意味に解釈したために、その意味はほとんど逆になっている。そして最後にフロイトは、これらの用語の対立を、ブロイアーが導入した区別に当てはめたのである。

『夢解釈』では、顕在的な不合理は、潜在内容におけるアイロニックな批判に対応すると述べられているが、ブロイアーの理論に対する形式的には恭しい対応のなか

る。」 Joseph Breuer, “Studien über Hysterie,” in Sigmund Freud, *Gesammelte Werke*, I, Werke aus den Jahren 1892-1899, herausgegeben von Anna Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris, O. Isakower, Imago Publishing Co., Ltd., London, 1952, Sechste Auflage, S. Fischer Frankfurt am Main, 1991, pp. 256-257.

〔ヨーゼフ・ブロイアー『フロイト全集2 ヒステリー研究』、芝伸太郎訳、岩波書店、2008年、250頁。〕

¹⁶ Cf. *VMP*, pp. 199-206/221-229.

¹⁷ Cf. *VMP*, p. 203/225.

に、はなはだしい無礼さを見ることができるだろう。(VMP, pp. 204-205/226-227)

「カードの配り違い」とは、この章の冒頭で参照された、ラプランシュの師とも言うべきラガーシュの読解を踏まえたものである。ラガーシュは『彼岸』の錯綜した議論を整然と腑分けし、概念の関係を整理した¹⁸。「批判すること (critiquer)」の語源が「カードの配り直し」「混ざりあったものの振り分け」であることを考えるなら、この整理は「批判」としては正当である¹⁹。しかし、精神分析が欲望をはじめとした、無意識の産物を読み解くものであるなら、概念関係のクリアな整理だけでは不十分であるとラプランシュは述べる。これに対して彼は、精神分析家として、この錯綜した状態がなぜ生じるのかを問う。つまりフロイト自身を精神分析するということである。この問いの答えの一つが与えられるのがこの引用箇所である。彼はこのねじれについて、フロイト自身の論考『夢判断』における仮説を見出している。ここで参照されているのは、同書の第6章 G「荒唐無稽な夢」で、この箇所ではフロイトは、夢における荒唐無稽さが生じるのはなぜか、について検討している。様々な実例が挙げられるが、ひとつの仮説として夢思想において、何かへの批判や嘲笑を手持ちの手段で表現しようとするさいに、不条理な夢を生み出すと述べる²⁰。すなわちラプランシュはフロイト自身を精神分析し、この奇妙なねじれにフロイトのブロイヤーに対する慇懃無礼な態度を見出しているのだ。有機体が自らの適切なバランスを保つことを基礎に据えていたブロイヤーの「穏当」な仮説に対する、有機体においてエネルギーを零度まで放出しようとする傾向を見出し、それを生物に内在する傾向であるという壮大な構想を打ち出すフロイトの軽蔑をラプランシュは見出しているのである。ラプランシュはこのフロイトの態度から、『彼岸』における生物学主義的な仮説にまでいたる遠大な思弁が展開されると述べる。これが、前節でわれわれが「思弁する」から引いた箇所の「はなはだしい無礼さ」の内実である。次節では改めてデリダのテキストに戻り、デリダはこのような自由エネルギーの問題をいかに捉えていたかを検討していく。

¹⁸ Cf. VMP, pp. 183-185/205-207.

¹⁹ 「しかし私たちの考えによれば、もし精神分析のまさに創始者が提起した概念に対して、「精神の分析家」として取り組もうとするなら、そのような批判や概念分析の構想は、不完全なものにすぎない。もちろん、死の欲動については、カードの配り違いがあり、ゲームは失敗している。だからといって、始めからやり直して、より正確にカードを配り直すだけで十分だろうか。私たちはカードを配り直すことだけでは満足できない。むしろ、まず以前から手元にある「持ち札」を解釈しなくてはならないのだ。」(VMP, p. 185/207)

²⁰ 「夢思考は——少なくとも精神的に健康な人間の夢思考は——決して不条理ではない。そして、夢工作によって、不条理な夢とかこの要素が不条理な夢とかが産出されるのは、夢思考の中に、批判や軽侮や嘲笑があつて、夢工作がそれらを自分なりの表現形式でもって呈示しなければならなくなったときなのである」(Sigmund Freud, “Die Traumdeutung,” in *Gesammelte Werke*, II/III, herausgegeben von Anna Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris, O. Isakower, Imago Publishing Co., Ltd., London, 1942, Achte Auflage, S. Fischer Frankfurt am Main, 1998, p. 447. [『フロイト全集5 夢解釈II』、新宮一成訳、岩波書店、2011年、209頁。])。この点については、『精神分析における生と死』邦訳227頁、注39の訳注を参照。

3. フロイトにおける「拘束」——デリダによる読解

このようなラプランシュによるフロイト読解を踏まえて、デリダにおける自由エネルギー／拘束されたエネルギーの問題を検討していこう。一方で自由エネルギーが流れる心的プロセスは一次過程と呼ばれ、快原理に従っていた。他方でエネルギーが拘束されるのは二次過程であり、それは現実原理に従っていた。前者はできる限り早く緊張を放散することを快とし、後者は放散がすぐになされない場合に快を将来に延期する。しかし、仮に屈のような状態、すなわちゼロ原理に従って緊張がゼロのままであったとしたら、以後に快が生じることもなく、死んだような状態となる（だからこそ、フロイトにおいて涅槃原理や死の欲動という術語によって、無機的な状態としての死が目指されることになる）。それゆえに、デリダは「純粋な快も、純粋な現実も理想的な境界、さらに言えばフィクションである」（CP, p. 304）と言う。つまり、快原理と現実原理、ひいては一次過程と二次過程、自由エネルギーと拘束されたエネルギーの対のうち、どちらか片方だけが機能している、すなわち純粋な状態にあるということは理論的な想定でしかありえず、現実としては双方が共存していなければ心的システムはありえないとするのである。そして、死の欲動仮説を踏まえて、生には死に向かう傾向が内在しているということも含めて、生と死が対立しないと主張されるというのである。曰く、「死が〔生に〕対置しえないものであるなら、それはすでに生死〔*la vie la mort*〕である」（CP, p. 305）。ここで言われる「生死」とは、「思弁する」の初出となった講義のタイトルである。デリダは当初「生と死（*la vie et la mort*）」というタイトルの講義を依頼されたが、両者を対置し、別々のものとして併置するかのような接続詞「と」を削除することで、生と死が単に外在的に併置され、対置されるものではなく、混交したものであるということを、講義を通じて示すと述べている²¹。すなわち、その実例の一つとして、フロイトの『彼岸』が読解されているということである。つまり、快原理と現実原理、一次過程と二次過程、自由エネルギーと拘束されたエネルギーという概念系について、この生と死、いやむしろ「生死（*la vie la mort*）」との関係で考察されることになる。

さて、当の自由エネルギーおよび拘束されたエネルギーの关系到引き返すなら、フロイトによるブロイアーの慇懃無礼な「誤読」が含まれている『彼岸』第四章のくだりは、以下のように続いている。再度引用しよう。

興奮は一つの要素から別の要素へと進んでゆくさいに抵抗を乗り越えられなければならない、そのようにして抵抗を低減させると興奮の持続的痕跡が残される（これを通道という）と仮定できる。それゆえ、意識系においては、ある要素から別の要素に移行するさいのそうした抵抗はもはや存在しないことになろう。この考えは心的システムの諸要素についてブロイアーが示した、静止した（拘束された）備給エネルギーと、自由に動く備給エネルギーという区別とひとまとめにすることができる。

²¹ Cf. LM, pp. 19-22.

〔……〕しかし、こうした事態についてはさしあたり、できるだけ曖昧な見解表明に留めておく方がよいだろう。いずれにせよ、われわれはこの思弁によって、意識系の位置との、そしてその系のゆえに興奮の出来事がもつようになる特殊性との関連で意識の出現を考えることができるようになったのだ。(J, p. 26/78-79)

フロイトは自らの認識論にブロイアーにおける二つのエネルギーを結びつけようとする。しかし、その対応関係はねじれたものだった。このねじれに起因する「無礼さ」をラプランシュは指摘していた。他方でデリダがこの箇所の読解で注目するのは、このブロイアーへの両義的な態度ではない。彼が関心を寄せるのはむしろ、引用の後半部で出てくる思弁、すなわち科学的で系統だった論述ではない思考が可能になるために、ブロイアーに言及しながらも、見解表明を曖昧にしておこうとする態度である。デリダは以下のように言う。「さて、フロイトは乱暴にもこの議論を打ち切ってしまう。彼が言うところでは——「思弁」という語をもう一度利用しながら——「思弁」の現状においては、意識の起源、すなわち知覚-意識系という場と興奮プロセスの特殊性とのあいだの関係をすでに発見したのに、ことをできる限り曖昧なままにしておいたほうがよい」(CP, p. 368)。デリダはブロイアーへの曖昧さと『彼岸』における思弁を結びつけようとする。なぜか。それは、デリダが『彼岸』を貫くテーマとして、自由エネルギー／拘束されたエネルギーともかかわる *binden* (結びつける、拘束する) というキーワードに注目しているからだ。

「拘束 (die Bindung)」とはフロイトが『科学的心理学草案』以来、さまざまなフロイトの著作で用いてきた概念である。『草案』においては自由エネルギー／拘束されたエネルギーという対にかんして用いられ、エネルギーが自由状態から拘束状態に移行させること、つまり一次過程から二次過程のあいだの橋渡しの役割を果たしている。ここで想起しなければならないのは、『草案』の段階では自由状態、一次過程でエネルギーが自由に解消されることが快だとされていたという点である。

しかし当初二次過程における、エネルギーを留めておくこととして記述されていた「拘束」という語は、『彼岸』の論述が進んでいくにつれて意味が広がっていく。例えば第4章では、知覚-意識系を過剰な刺激から守る刺激保護が、身体的苦痛においては一定程度突破され、傷ついた箇所から中枢装置に向かって連続的な興奮が流入するとフロイトは仮説を立てる。心的システムはそれに対して、相応の備給をすることで対応しようとするが、それによって全体としては備給エネルギーが貧困化して、麻痺にいたると言う。フロイトはこの仮説をさらに展開しながら、以下のように言う。

こうしたやり方で引き出される結論とは、それ自身高度に備給されたシステムは、新たに流れ込んできて付け加わるエネルギーを受け止め、それを静止備給に変換することができる、つまり、それを心的に「拘束する」ことができるというものである。系自身の静止備給が高度であればあるほど、それだけまたそれが有する拘束する力も大きいということになる。(J, p. 30/82-83)

つまり、ショックを受けたさいに外部から流入する刺激が、心的システムを不安定にすることに対する方策として、「拘束」という語が用いられているのである。また、静止備給が高度であれば、外部刺激を拘束する能力も上がるというのは、ねじれた形であるとはいえブロイアーの考えに近づいているとも考えられる。これに対してたとえば、このときに突破された箇所（箇所）の備給が高まるのは興奮量の直接的な伝導にすぎないという反論もありえよう。しかし、そのような異論も誤っているとフロイトは言う（*J*, p. 30/83）。そのような異論は心的装置のエネルギー備給の増大だけにとどまり、刺激保護を貫くほどの刺激を受けたさいに、当該の箇所（箇所）に備給が行われて他の箇所（箇所）での心的な営みが貧困化する、つまり他のシステムが麻痺することを説明できないとフロイトは考えている（*J*, p. 30/83）。それゆえ、刺激に起因する苦痛にも放散する作用があるということがフロイトの思考を妨げることはない。ここでの放散は反射的に起こるもの、すなわち心的装置を経由せずに起こりうるものだから、放散作用と快原理の反例にはならないという。逆に言えば、心的装置を経由して放散しようとするときには快原理が作用している。つまり、外傷神経症において、快原理は働いていないのではない。苦痛とは、外部刺激が刺激保護を突破し、快原理が働く前に起きるのだとフロイトは言うのである。そのときに起こるのが拘束だということである。デリダはこの箇所における「拘束」、つまり Binden もしくは die Bindung について、以下のように注釈している。

フロイトは以下のような法則を表明する。すなわち、あるシステムは、安息状態にある当のシステムの負荷〔charge〕が大きければそれだけいっそう諸々のエネルギーを「binden」すること、つまり縛りつける〔lier〕ないしはぴんと張る〔bander〕ことが可能になる。（*CP*, p. 370）

ここでの「拘束」の説明は、フロイトの説明の字義通りの注釈に過ぎないが、ここで注目すべきは動詞 binden の訳語として、「拘束する」「結びつける」「縛りつける」を意味する lier だけでなく、「ぴんと張る」を意味する bander も採用している点である。この動詞には lier という動詞の意味にはない、「緊張させる」という意味も含まれる。ここでの緊張とは、拘束が可能になるための静止備給が保たれるという点だろう。すなわち、前節でのラプランシュの用語で言うなら、「恒常原理」のために緊張が一定の基準値を持つということである。ここにデリダは快原理の意味の転換を見る²²。つまり、快原理は『彼岸』冒頭でまさに確認されていたように無条件に働くとは考えられなくなる。それは刺激に対して、然るのちに対応する、というようにアプリアリなものではなくなり、一定程度の拘束を必要とするものとなる。この快原理がアプリアリに認められるものでなくなったことを受けて、外傷神経症者が過去の経験がフラッシュバックするかなのような夢を見ることについても、フロイトは以下のように述べる。

²² 『彼岸』において快原理という概念の意味にずれが生じている点は、ラプランシュも指摘するところである。VMP, p. 198/220 を参照。

とはいえ、災害神経症患者の夢はそうしたことを通して、快原理が支配を始めるに先立って解決されて〔Lösung〕いなければならない別の課題のために役立てられている、と仮定することは許されるだろう。〔……〕そのようにして夢は、快原理に矛盾はしないが、しかし快原理から独立し、そして快の獲得と不快の回避という意図以上に根源的なものに思われる、心的装置のある機能に対する眺望をわれわれに与えてくれるのである。(J, p. 32/85)

戦争神経症や災害神経症において観察された快原理に反すると思われた過去の苦痛な経験を再現する夢は、快原理が働いて、不快を排除しようとするよりも前になされなければならない別の課題に役立てられるという。この考察から、快原理に先立つ死の欲動という仮説が導き出されるのだが、デリダはこの引用の「Lösung」という箇所注目する。デリダが参照する『彼岸』のジャンケレヴィッチ訳ではこの語は「la réalisation」、すなわち「実現」と訳され、フランスで現在主に参照されるラプランシュ訳では、「être accomplie」、すなわち「完遂され」と訳されているが、デリダはこの語を字義通り、「la solution」と訳し直す。Lösung の動詞形 lösen は「解決する」、「解放する」、「緩める」などを意味し、フランス語の solution もラテン語で「解く」を意味する動詞 solvere に由来する。つまりここでもデリダは拘束／非拘束の含みを読み取っている。身体的苦痛については外部に由来する過剰な刺激を拘束することで沈静化し、他方で不快な夢という心的システム内部に由来する刺激は刺激を解くことで、快原理とは別の目的が実現されることになる。デリダは先の引用を踏まえて、快原理の支配および、その時間性について以下のように論じている。

それ〔快原理の支配〕は歴史において、根源的な発生において相対的に遅れた効果なのだろう。すなわち、前もって快原理に属しているわけではない土地、快原理が元からあったわけではない土地に対する勝利なのだろう。勝利と捕獲、拘束〔liaison〕は脱拘束〔dé-liaison〕より優位に立つ〔……〕。(CP, pp. 371-372)

快原理はエネルギーが自由に移動する状態（つまり脱拘束）を避け、拘束することで安定化させようとするようになる。快原理はもはや、緊張を放散し切るだけのものではなく、当初「快原理」と呼ばれていた原理——ゼロ原理——は「死の欲動」や「涅槃原理」と呼ばれることになる。この概念の位置ずらしを経た結果、快原理は心的システムに初めから存在していたのではなく、欲動のエネルギーによって高められた緊張に対して、恒常的な基準値に止めるように拘束し、支配することで心の平安を保つ原理として、その意味づけを変えられる。

そして続く第五章で内部に由来する興奮としての欲動が論じられるさいにも「拘束」の問題が取り上げられる。これまでのフロイト理論に則して考えるなら、無意識系において欲動が従うのは一次過程であった。そこからフロイトは、一次過程において到来す

る欲動の興奮を拘束することが、心的装置にとっての課題となると述べ、さらに以下のように続ける。「この拘束に失敗するなら、外傷神経症に類似した障害が引き起こされるだろう。拘束が成功してはじめて、快原理（およびそれが変容した現実原理）による支配が妨げなしに貫徹されうるだろう」（J, p. 36/88）。やはりここでも、欲動に由来する興奮を快原理に従って拘束することが問題となっている。ゼロ原理たる快原理は、当初は恒常原理たる現実原理に対立し、前者が修正を受けることで後者になるとされた。つまり、快原理は現実原理に変容することがあっても、それは一次過程が満たされるとは限らないという現実に適応するためであり、一次過程を支配することはなかった。それが今や、快原理は欲動による緊張を拘束し、さらにはそれを支配しようとさえする。デリダはこの『彼岸』第五章の劈頭を、「このテキストのもっとも豊かで、もっとも活動的な局面」（CP, p. 372）として関心を寄せている。ただし、この箇所ではフロイトはブロイアーの名を挙げているが、デリダはそのことに触れず、以降もブロイアーの名が出ることはない。この箇所以降『彼岸』においてブロイアーが言及されることはなく、デリダはフロイトによるブロイアーのエネルギー論の「はなはだしい無礼さ」を伴う「誤読」を不問に付してしまっているかのようだ。むしろ、これまで見てきたように、この拘束／脱拘束という対を積極的に『彼岸』を読解するための鍵語として注目している。それはなぜだろうか。次節では、再度『彼岸』において「拘束」という語が登場する第七章を巡ったデリダの読解を検討し、本章の結論を提示したい。

4. 生死の運動としての拘束／脱拘束

『彼岸』の最終第七章では、それまで論じられてきたことを踏まえて再び欲動を拘束することで、一次過程を二次過程に代替することで快原理が満たされるということが確認されている。そして、死の欲動という仮説を踏まえた上での快原理の新たな役割が述べられている。

機能と傾向をこれまで以上にきつぱりと分けることにしよう。そうすると、快原理は、心的装置をおよそ興奮なき状態にするか、そうでなければ、装置内の興奮の値を恒常に保つ、もしくはできる限り低く保つ、という機能に仕える一つの傾向であることになる。「興奮なき」とか「恒常」とか「できる限り低く」といった言い方のうち、いずれが良いのか、いまだはつきりとは決めかねるが、そのように確定された機能が、無機的世界の休息に帰還しようとする、あらゆる生命体のもっとも一般的な追求に参与していることは述べておこう。誰もが経験していることだが、人間に到達可能な最大の快である、性行為の快というものは、高く上昇した興奮が瞬時のうちに消失することによっている。だとするとしかし、欲動の蠢きの拘束とは、放散の快によって興奮を最終的に解消すべき準備的機能だということになるだろう。

(J, p. 68/122-123)

フロイトは依然として、快原理に関してゼロ原理と恒常原理とで混同しており、最終的には機能を確定させてはいない。しかしここで重要なのは、その機能が「無機的世界の休息に帰還しようとする」営みに関連していると述べられている点である。すなわちここでこそ死の欲動——改めて言うなら、ゼロ原理としての——に快原理が奉仕する、という新たな図式が明言されている。さらに、欲動の蠢きを拘束することについても、欲動のエネルギーがすぐに放散されてしまわないように、放散をぎりぎりまで保つことで興奮を上昇させることだということが、性行為の例を挙げながら述べられる。つまり、拘束も、興奮をゼロにしようとする死の欲動のための機能だとされる。しかし当初の問題であった快原理と反復強迫の関係については未解決のまま、ハリーリーというイスラムの詩人の『マカーマート』という詩からの引用で『彼岸』を締めくくっている。

デリダが目指するのはこのフロイトの身振りである。最終的に、反復強迫と快原理の関係についての問題は解決されずじまいのまま、死の欲動について仮説が立てられ、新たな問いが開かれて終わっている。この未解決な状態こそが、『彼岸』の鍵となるとデリダは言う。

脱拘束、大団円〔dénouement〕、分離〔détachement〕、問題の解決〔résolution〕、〔…〕 lösen についてのこれらの規定が、われわれが読んでいるテキスト、われわれが終わりなき物語のように読んでいるテキストを支配している。（CP, p. 416）

当初の問題であった反復強迫と快原理の関係について明確な結論の与えられない『彼岸』は当然、大団円——この原語 *dénouement* も、「ほどく」を意味する *dénouer* から来ている——を迎えたテキストではない。そして、さらに、快原理と反復強迫の関係の問題が「解明されていない〔ungelöst〕」ことと、Lösen、すなわち緩めて解くことやその対義語としての Binden を結びつけることも、いささか牽強付会にさえ思える。デリダ自身、この *ungelöst* という語についての注目は「些細なこと」と認めている。しかし、上記の問題系がそもそも『彼岸』というテキストを可能にしていることについて、以下のように続けている。少々長くなるが、デリダのフロイト読解の勘所なので全て引用しよう。

私が行っている〔「未解決な（*ungelöst*）」という語と、エネルギーの拘束／解放（Binden/Lösen）との〕関係づけは直接的なものではない。それは一連の問いの仲介を経由する。たとえば、問題を解決する〔*résoudre*〕とはどういうことか〔という問いである〕。問題となっているのが理論的な問いであれ、実践的な問いであれ、少なくともその困難や障害、難航とかかわることになる。解決を目指す〔*tendre vers la solution*〕ということは障害のできるだけ近くに最大量のエネルギーを集め、結びつけ＝拘束し〔*lier*〕、「ぴんと張る（*bander*）」ことである。すなわち、緊張を当の障害において高めることで、解決によって「問題」だけでなく、問題のそばに寄せ集められたエネルギーの繋がりを解くようにすることである。解決は、問

題が増幅したところの欲動による緊張——身体的であれ、心的であれ——を解く。これらの図式は、その平凡さにおいてフロイト的である。私がこれらの図式を再度言及するのは〔……〕最初から私がしていたように、フロイトが言っていること、フロイトがしていること、『彼岸』が扱っているもの（対象や仮説、法則、問題）と、フロイトによるエクリチュールの展開、パフォーマンス、操作とを関連づけるためである。（CP, p. 417）

なにがしかの問題を解くこととは、心的エネルギーを集めることを必要とする。そして、問題が解決したら集められたエネルギーは解消してしまう。『彼岸』において心的な緊張の解消を目指す傾向は当初は快原理に割り当てられ、最終的には仮説的な形でこそあれ死の欲動に割り当てられていた。すなわち、デリダはそのような問題解決の運動についてのフロイトの考えたモデルを、フロイト自身が『彼岸』の論述において行為遂行的に行なっていると読んでいるのである。換言するなら、何かしらの結論に至りそうになっても結論を出さずに、さらに別の問題を扱い、当初の問題を宙づりにしようとする『彼岸』の叙述そのものに注目しているのである。それでは、このようなフロイトの身振りに注目する行為遂行的な読解から、どのようなことが言えるだろうか。

デリダは、先の実フロイトからの引用にも読まれるように、欲動の心的生において支配していた一次過程を快原理が拘束し、意識的な心的プロセスである二次過程に置き換えるという機能に注目する。二次過程によって自由に移動可能な備給エネルギーは、不動の備給エネルギーに変換される。デリダはこの拘束と置き換えの現象について、「不動なもの」とされた備給は、より活気のある＝刺激的な＝緊張した〔tonique〕ものとなる。緊張＝刺激性〔tonicité〕という価値は正式に、拘束の効果に結び付けられる〔……〕」（CP, p. 421）と説く。欲動の蠢きを拘束することで、心的システムは適度な緊張をもたらすという。ここでもやはり、フロイトのモデルはブロイアーの「自由に使用可能な」静止エネルギー概念に近づいている。拘束によって、システムは活性化するというのである。しかし、これまで論じてきたように、フロイトにおいては欲動の拮抗に代表される、力動性がこの拘束を支えている。この拘束作用と快原理のねじれた一致が、ホメオスタシスのようなシステムと完全に一致することはない。ただ、それでもなお快原理はもはや単に緊張の放散だけを目指すものではないというのだ。欲動の蠢きを拘束することも——たとえそれがその最中で不快を催すものであっても——、快原理に仕えるものだと言っているのだ。

さて、ラプラランシュとポンタリスの『精神分析用語辞典』における「拘束」の項目では、「『快原理の彼岸』では、拘束の問題は単にフロイトの省察において前景化するだけでなく、複雑な様相を呈する」²³とされる。すなわち、『科学的心理学草案』以来の、エネルギーの自由状態から拘束された状態への移行という拘束と、外傷的な出来事に対応するための、快原理と対立しない拘束という二種類の拘束が挙げられるが、この二つ

²³ Laplanche / Pontalis, *op. cit.*, p. 223. [ラプラランシュ、ポンタリス『精神分析用語辞典』、137 頁。]

の拘束が存在するための疑問は開かれたままだとされる²⁴。

それに対して、デリダはこの拘束こそが、心的システムにおける最も根源的で決定的な機能であると述べる（CP, p. 421）。拘束が欲動による緊張を整理しつつ、二次過程を活発にするために緊張を与えるものであるなら、心的な刺激の緊張と放散のリズムを可能にするのが拘束だと言えよう²⁵。この拘束は強すぎると不快が生じる。しかし、拘束が全く行われないことも、不快、さらには心的システムの破壊、そして死へといたってしまう。ここにおいて一次過程と二次過程、生と死、快と不快は相互に截然と切り離されるものでなくなり、一方が他方を必要として、両者が相互に他方の要素を含みもつことで、生、もしくは「生死」が可能になる。それゆえデリダは、締めすぎず緩めすぎずという、「恒常原理」と生を可能にする機制の背景にある拘束の機能がもつ二重性を重視しているのだ。

デリダもラプランシュの言葉で言う「カードの取り違い」については、『精神分析における生と死』を読み、フロイトのブロイアーに対する「はなはだしい無礼さ」に言及しているのだから、理解していたはずである。しかし、「思弁する」は「カードの取り違い」がなぜ起こるのかを問うのではない。むしろそれは、複雑に錯綜した概念が——つまり取り違いられたカードが——奇妙な仕方で揃ってしまったことに注目しているのだ。さらに、デリダが「思弁する」において重要視していたのは、フロイトが自らの思弁において当初の問題設定への回答を与えることに伴う欲動の解消を拒む姿勢であった。それゆえに、本稿冒頭でも触れたような英米におけるアンナ・フロイトらによる『彼岸』の理論的な次元での無視が、その論述の錯綜によるものであるなら、それに対して少なくともデリダが『彼岸』を重視するのは、その議論の錯綜ゆえであると言えるだろう。そしてデリダが『彼岸』におけるフロイトの身振りのうちに、そしてフロイト自身において定義づけが曖昧になってしまっていた「拘束」概念のうちに見て取っていたのは、フロイト的な生の運動の行為遂行的な表れであると言うことができるのではないだろうか。そしてフロイト当人を精神分析したラプランシュに対して、このテキストの形式と内容の入れ子構造や行為遂行性に注目して生死について論じたのが、「思弁する」におけるデリダの『彼岸』読解の意義であろう。

〈文献一覧〉

以下の著作については、略号で参照し、原著／邦訳の順にページを指示する。

DERRIDA, Jacques

CP : *La Carte postale*, Flammarion, 1980.

LM : *Séminaire La vie la mort (1975-1976)*, Les Éditions du Seuil, 2019.

²⁴ Ibid. [同前。]

²⁵ この点についてわれわれはすでに、デリダのフロイト読解におけるリズムや周期性という問題から論じている。吉松寛「フロイトの読者、デリダにおける時間、生、リズム」、『関西フランス語フランス文学』、第25号、日本フランス語フランス文学会関西支部、2019年、55-67頁を参照。

FREUD, Sigmund

EP : Sigmund Freud, “Entwurf einer Psychologie,” in *Gesammelte Werke*, Nachtragsband, Texte aus den Jahren 1885-1938, herausgegeben von Angela Richards unter Mitwirkung Ilse Grublich-Simitis, S. Fischer, Frankfurt am Main, 1998, S. 373-486. [「心理学草案」『フロイト全集第3巻』所収、総田純次訳、岩波書店、2010年、1-105頁。]

J : “Jenseits des Lustprinzips,” in *Gesammelte Werke*, XIII, herausgegeben von A. Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kreis, O. Isakower, Imago Publishing Co., Ltd., 1940, Zehnte Auflage, S. Fischer, Frankfurt am Main, 1998, S. 1-71. [「快原理の彼岸」『フロイト全集第17巻』所収、須藤訓任訳、岩波書店、2006年、53-125頁。]

LAPLANCHE, Jean

VMP : *Vie et mort en psychanalyse*, Éditions Flammarion, 1970. [ジャン・ラプランシュ『精神分析における生と死』十川幸司、堀川聡司、佐藤朋子訳、金剛出版、2018年。]

〈欧文文献〉

BREUER, Joseph / FREUD, Sigmund, “Studien über Hysterie,” in Sigmund Freud, *Gesammelte Werke*, I, Werke aus den Jahren 1892-1899, herausgegeben von Anna Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris, O. Isakower, Imago Publishing Co., Ltd., London, 1952, Sechste Auflage, S. Fischer Frankfurt am Main, 1991, S. 75-312. [ヨーゼフ・ブロイアー『フロイト全集第2巻 ヒステリー研究』、芝伸太郎訳、岩波書店、2008年。]

FREUD, Sigmund, “Die Traumdeutung,” in *Gesammelte Werke*, II/III, herausgegeben von Anna Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris, O. Isakower, Imago Publishing Co., Ltd., 1942, Achte Auflage, S. Fischer Frankfurt am Main, 1998. [『フロイト全集第4巻 夢解釈I』、『フロイト全集第5巻 夢解釈II』、新宮一成訳、岩波書店、2011年。]

HÄGGLUND, Martin, *Radical Atheism—Derrida and the Time of Life*, Stanford University Press, Stanford, 2008. [マーティン・ヘグルンド『ラディカル無神論 デリダと生の時間』吉松寛、島田貴史、松田智弘訳、法政大学出版局、2017年。]

JOHNSON, Christopher, *System and Writing in the Philosophy of Jacques Derrida*, Cambridge University Press, 1993.

LAMY-RESTED, Elise, *Exces de vie...Derrida*, Editions Kimé, 2018.

LAPLANCHE, Jean / PONTALIS, Jean-Bertrand, *Vocabulaire de la psychanalyse*, PUF, 1967. [ジャン・ラプランシュ、ジャン＝ベルトラン・ポントリス『精神分析用語辞典』村上仁監訳、みすず書房、1977年。]

VITALE, Francesco, *Biodeconstruction—Jacques Derrida and the Life Sciences*, SUNY Press, 2018.

〈日本語文献〉

小川豊昭「『快原理の彼岸』——死の欲動と反復」『現代フロイト読本 2』西園昌久

監修、北山修編集代表、みすず書房、2008 年、504-520 頁。

十川幸司『フロイディアン・ステップ 分析家の誕生』みすず書房、2019 年。

中山元『フロイト入門』筑摩書房、2015 年。

吉松寛「フロイトの読者、デリダにおける時間、生、リズム」『関西フランス語フランス文学』、第 25 号、日本フランス語フランス文学会関西支部、2019 年、55-67 頁。